

【論文】

東亜同文書院の中国語文章語教育について  
—愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵テキストを中心に—

愛知大学東亜同文書院大学記念センター 石田 卓生

はじめに

I 東亜同文書院の二つの中国語授業

II 青木喬テキストについて

1. 『実用支那商業文範』
2. 『支那時文類編』、『現代支那尺牘教科書』（初版）
3. 『改輯支那時分類編』、『現代支那尺牘教科書』（1924年版）
4. 『支那時文類編第一輯』

III 清水董三、福田勝蔵テキストについて

1. 『商業尺牘教科書』
2. 『商業応用文件集』
3. 『普通尺牘文例集』

おわりに

はじめに

本稿は戦前上海にあった高等教育機関東亜同文書院（1901-1945）で行われていた中国語の文章語教育を考察するものである。ここでいう文章語とは文学作品など芸術表現での「雅」なものではなく、「俗」とされる日常生活で使われる書き言葉のことである。

東亜同文書院は中国を専門とする学校であった。卒業生は日中間のさまざまな場面で活動したが、それを可能としたのはこの学校の教育で培われた中国語によるコミュニケーション能力である。東亜同文書院は中国語テキストを刊行したり、戦後に愛知大学によって完成されることになる『中日大辞典』（中日大辞典刊行会、1968年）へと繋がる辞書編纂作業をすすめたりするなど中国語の教育、研究を行っており、その象徴的な存在が教員たちによって作成された会話テキスト『華語萃編』である。これまで東亜同文書院の中国語教学についての研究の多くはこのテキストについての考察であった。たとえば今泉潤太郎「東亜同文書院における中国語教学：『華語萃編』を中心に」（『愛知大学国際問題研究所紀要』第103号、1995年9月）、松田かの子「官話教科書『華語萃編』の成立に関する一考察」（『藝文研究』第88号、2001年6月）、紅粉芳恵「『華語萃編』に関する研究ノート：東亜同文書院中国語教材の宝典的定本」（『アジア文化交流研究』第5号、2010年2月）である。しかし『華語萃編』だけでは東亜同文書院の中国語教育の全容をとらえることはできない。なぜならばそれが会話テキストすなわち口語教育のためのものだから

である。東亜同文書院では口語教育の一方でビジネス文書を扱うための実用的な文章語の教育も行われていた。中国にかかわる活動をするに際して中国人との会話によるコミュニケーションはもちろん重要であるが、文書进行处理することができなければ物事を円滑にすすめることはできない。中国を専門とし卒業生の多くが日中間のさまざまな現場で活動した東亜同文書院の中国語教育を考えるには口語教育とあわせて文章語についても考えなければならないのである。

こうした問題意識にもとづき、本稿は東亜同文書院で使用された文章語教育向けテキストを検討することによって、その文章語教育の実態をあきらかにしたい。

## I 東亜同文書院の二つの中国語授業

東亜同文書院には政治科・農工科が短期間設置されたことがあったものの中国にかかわるビジネス教育を行う商務科が常に中心であった。そこでは中国での商取引に従事するための実用的な中国語能力の習得が目指された。話し言葉だけではなく、もちろん実的な文書进行处理する能力も必要とされる。1905年(明治38)に廃止されるまで大量

の文書を扱う行政官を選考するために口語と隔絶した難解な文章語での文章作成が要求される科挙がおこなわれていたことを考えれば、当時の中国における文章語の重要性を推し量ることができよう。戦前の中国語語学研究についての資料集である波多野太郎編『中国語学資料叢刊』(不二出版、1984-1987年)が文章語テキストを会話テキストや辞書とは別のカテゴリーにわけて「尺牘編」に44種、「尺牘・方言研究編」に15種を収録しているように、東亜同文書院が存在していた時期、中国語教育において文章語は口語とはっきりわけられたもう一つの学習すべき言葉であった。

そうした文章語を東亜同文書院はどのように扱っていたのだろうか。東亜同文書院の一週あたりの中国語の授業回数をまとめたものが表1である。表中の1908年(明治41)時に4年生がないのは秋入学3年制であったためである。専門学校令の適用を受けた1921年(大正10)から春入学4年制となった。1908年当時の科目「清語」は口語、「漢字新聞」は中国語新聞の講読、「漢文尺牘」は尺牘すなわち書簡文についての授業である。文章語を扱うのは「漢字新聞」と「漢文尺牘」である。1921年当時は「支那語」が口語、「支那時文及尺牘」が文章語の授業である。時文とは現代文といった程度の意味で文章語全般のことをさし、その中に尺牘は含まれている。

二つをくらべると1908年より1921年の方が文章語の授業が増えているが、これには学

表1 商務科中国語授業数(数字は一週あたりの授業回数)

		1年生	2年生	3年生	4年生
1908年	清語	11	10	10	-
	漢字新聞	1	1	1	-
	漢文尺牘	0	0	1	-
1921年	支那語	9	9	6	6
	支那時文及尺牘	0	2	2	2

1908年分は『沿革史』(東亜同文書院学友会、1908年、下編68頁)、1924年分は『東亜同文書院大学史』(滬友会、1982年、132-133頁)より筆者作成。

生の漢文の素養が関係していた可能性がある。江戸時代には新井白石が漢文を駆使して朝鮮通信使と交流し、明治時代初期には夏目漱石が漢文の紀行文『木屑録』を著したようにもともと日本の知識階級の漢文の読解力・表現力は高かった。それは漢学での学び、すなわち四書五経をはじめとする同時代より古い中国語の文章語を訓読することによって培われたものである。漢文

を学ぶことが学習の根幹であった以上、そのような知識の基層をもつ彼らの書き言葉自体が漢文訓読の影響をうけていたともいえる。しかしそうした状態は時代を経るにしたがい変化していった印象がある。幕末から明治初期の漱石や森鷗外といった知識階級の人々の今でいうところの初等教育は漢文を読むものであったが明治政府による教育制度が確立するにつれて漢文はさまざまな科目の一つにすぎなくなっていった。漢籍主体の学びが欧米に範をとるものへと転換されたり、言文一致が提唱されたりするなかで漢文に触れる機会は漸減していったのである。田中牧郎「近代書き言葉における文語助動詞から口語助動詞への推移：『太陽コーパス』の形態素解析データによる」（『近代語コーパス設計のための文献言語研究成果報告書』、国立国語研究所、2012年10月）によれば19世紀末から20世紀初頭にかけて雑誌『太陽』の記事の文章は文語体から口語体へと大きく変化している（図1）。この文語とは江戸時代以来の漢文訓読スタイルの文章語のことであるから、この研究は明治から大正にかけて日本人は漢文から疎遠になっていったことを示している。このことを踏まえて東亜同文書院の文章語授業増加を考えると、漢文の素養がある世代の学生は語彙的な問題を克服しさえすれば中国語の文章語の読み書きが可能となるが、漢文に親しんでいない世代の学生は学習事項が多くなり結果として授業回数が増えるだろう。

文章語授業増加のもう一つの要因として考えられるのは中国語自体の変化である。東亜同文書院が開院した1901年（明治34）当時の中国には規定された標準語やそれにもとづく国語教育は存在していなかった。東亜同文書院が上海で教育活動をしていた半世紀ほどの間にトーマス・ウェード『語言自邇集』に記された官話から現在の「普通話」にいたる中国語の変化が生じたのである。中華民国初期の文章語テキスト青木喬『現代支那尺牘教科書』（東亜同文書院、1924年）について波多野太郎が「本書は民国に入ってから、尺牘が通俗的になる変化を捉へて編んである」<sup>(1)</sup>とのべているように文章語そのものも大きく変わっていたのであり、それに対応するために学習事項が多くなり授業回数が増えたとも考えられる。

では東亜同文書院ではどのような文章語授業が行われていたのだろうか。関係者の回想に授業の具体的な様子を伝えるものはない。しかし東亜同文書院が刊行に関係したり、学内で用いられた文章語のテキストが現在に伝わっている（表2）。なお表中の「叢刊」は

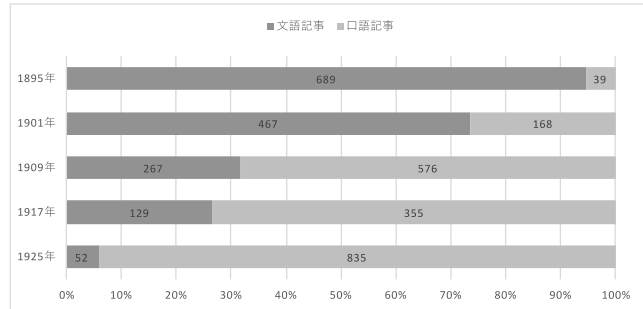


図1 『太陽コーパス』の文語記事・口語記事

田中牧郎「近代書き言葉における文語助動詞から口語助動詞への推移：『太陽コーパス』の形態素解析データによる」の図1「『太陽コーパス』の文語記事・口語記事」から筆者作成。

波多野太郎編『中国語学資料叢刊』（不二出版、1984-1987 年）収録、「彙刊」は波多野編『中国語文資料彙刊』（不二出版、1991-1995 年）、「集成」は波多野編『中国文学語学資料集成』（不二出版、1988-1990 年）、「同文書院センター」は愛知大学東亜同文書院大学記念センターを指す。

表 2 東亜同文書院にかかわる中国語文章語テキストの一覧

	著者	書名	出版	出版時期	構成	所蔵
①	仁科昌二 朱蔭成 青木喬	实用支那商業文範	上海日本堂書店	1914/9/10（大正3） 1920/3/10（大正9）		叢刊第3編尺牘編42
②	青木喬	支那時文類編	東亜同文書院	1918/4/15（大正7）	22章・389頁	彙刊第3編22 愛知大学 同文書院記念センター
③	青木喬	現代支那尺牘教科書			5章・561頁	京都大学 愛知大学 同文書院センター
④	山田謙吉	支那時文釈義	禹域学会	1923/7/20（大正12） 1924/1/5（大正13）	565頁	愛知大学等
⑤	青木喬	改輯支那時分類編	東亜同文書院	1924/1（大正13）	418頁	桜美林大学 長崎大学
⑥	青木喬	現代支那尺牘教科書	東亜同文書院	1924/5/5（大正13）	5章・645頁・7頁	叢刊第3編尺牘編43 同文書院記念センター
⑦	青木喬	支那時文類編第一輯	東亜同文書院	1928/3/10（昭和3）	10章・152頁	同文書院記念センター
⑧	清水董三	商業尺牘文例				
⑨	清水董三	普通尺牘文例集第一輯？				
⑩	清水董三 福田勝蔵	増補普通尺牘文例集 第一輯？				
⑪	福田勝蔵 斉鉄恨	普通尺牘文例集第二輯？				
⑫	福田勝蔵	商業尺牘教科書	東亜同文書院 支那研究部	1933/2/25（昭和8） 1936/3/25（昭和11） 1939/4/10（昭和14）	81例・67頁	同文書院記念センター
⑬	福田勝蔵	商業応用文件集	東亜同文書院 支那研究部	1934/4/1（昭和9） 1935/3/30（昭和10） 1936/3/13（昭和11） 1938/4/1（昭和13）	上中下編・112頁	同文書院記念センター
⑭	福田勝蔵	普通尺牘文例集	東亜同文書院 支那研究部	1937/5/27（昭和12）	上中下編・189頁	集成第3編11 同文書院記念センター

⑤青木喬『改輯支那時分類編』、⑧清水董三『商業尺牘文例』、⑨『普通尺牘文例第一輯』、⑩『増補普通尺牘文例集第一輯』、⑪『普通尺牘文例集第二輯』は未見である。このうち⑤『改輯支那時分類編』について書誌には「改輯支那時分類編」とあるが、これでは意味が通らないことから、「改輯支那時文類編」の誤りであるか、あるいは原本の誤植とおもわれる。

④『支那時文釈義』の著者山田謙吉（岳陽）は東亜同文書院教授、発行者の禹域学会<sup>(2)</sup>は東亜同文書院教員による組織である。山田が中国語担当ではないことや、古文と現代文の違いや方言など中国語全般についての概略の説明に紙幅の半ばを割いたり、例文につい

て詳細な語義をつけたりしていることから、本書は学外向けに刊行されたものであって東亜同文書院の授業で使われたとは考えられないため本稿では扱わない。

これらのうち『中国語語学資料叢刊』、『中国文学語学資料集成』、『中国語文資料彙刊』に復刻収録されたものは利用しやすいものであるが、⑦『支那時文類編第一輯』、⑫『商業尺牘教科書』、⑬『商業応用文件集』は、愛知大学東亜同文書院大学記念センター（以後同文書院センター）だけが所蔵する、これまでしられてこなかった新資料である。さらに同文書院センター所蔵テキストには授業の様子を直接伝える学生の書き込みが残っており、本稿はテキスト本文以外のそうした情報も参考にしつつ考察を進める。

## Ⅱ 青木喬テキストについて

東亜同文書院系の文章語テキストのうち6種について関与したり、作成したりしているのが青木喬である。1865年（慶応元）12月27日久留米藩士の次男として生まれ、1880年（明治13）県立久留米中学校（現福岡県立明善高等学校）に入学したのち陸軍士官学校を受験するが不合格、1890年（明治23）久留米市補助金を受けて日清貿易研究所に入り1893（明治26）年卒業。日清戦争では第二軍附通訳官として従軍。戦後1895年（明治28）10月台湾総督府民政局財政部租税課員、1896年（明治29）10月同府製薬所通訳事務嘱託（奏任待遇）兼民政局事務嘱託、1901年6月同府専売局翻訳官（高等官七等）、同年9月叙従七位、1902年（明治35）1月叙勲六等瑞宝章、1903年（明治36）4月高等官六等、叙正七位。日露戦争では満洲軍政委員附属通訳官となり1904年（明治37）7月安東県軍政署交渉科長、木材処理主任、政務調査委員、民事訴訟処理委員を兼務し、1905年（明治38）7月遼陽兵站司令部附となり叙勲五等双光旭日章。同年宏文学院支那学生監督、1908年（明治41）1月東亜同文書院教授となり1928年（昭和3）3月までつとめた。1933年（昭和8）6月満洲国政府に招聘され1941年（昭和16）当時満洲国國務院総務庁嘱託兼同院法制局嘱託（薦任三等）、1937年（昭和12）5月同国より叙勲五位<sup>③</sup>。このように彼は台湾や中国東北地方で豊富な実務経験をもった人物で、東亜同文書院の45年の歴史の中で実に20年間にわたって文章語教育を担当した。



図2 青木喬（第13期生卒業アルバムより）

### 1. 『実用支那商業文範』

『実用支那商業文範』の編著者は仁科昌二、経歴は詳らかではないが「凡例」に「本書收むる所の原文は編者の勤務する會社に往來せしもの」<sup>④</sup>とあることから当時中国に在住していた人物なのであろう。東亜同文書院の教員である青木喬は同僚朱蔭成とともに「訂補」者として刊行にかかわっている。内容はビジネス文書に注釈と日本語訳をつけたもの

で、書簡や契約書のほかに「説帖」を収録している。これはカードや名刺に用件を簡単に記す形式のことである（図3）。なお図3にみえる沈文藻は東亜同文書院教員で、もともとは青木の母校日清貿易研究所の教員であった人物である<sup>6)</sup>。

『実用支那商業文範』は東亜同文書院の教員がかかわっているものの、その授業で用いられた可能性は低い。序文は東亜同文書院院長根津一が寄せたものであるが、そこには「日本堂杉江君實用支那商業文範一書ヲ刊行セントシ其稿ヲ携へ來リ」<sup>6)</sup>と学外での出版であったことが示唆され、奥付にも著者仁科や発行者杉江房造、発行所日本堂とあるのみで東亜同文書院や教員の名は記されていない。東亜同文書院は出版の主体ではなく協力者の立場だったようである。また本書はすべての例文に日本語訳がつけられていることから独習することを前提としていたようであり、授業用途に適したテキストであるとはいいがたく、東亜同文書院の授業用ではなかったと考える。

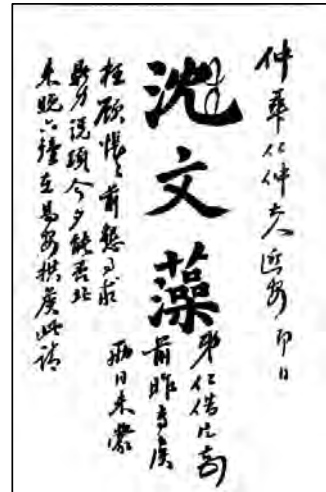


図3「説帖」実例（『実用支那商業文範』より）

## 2. 『支那時文類編』、『現代支那尺牘教科書』（初版）

青木喬による東亜同文書院用のテキストとして確認できる最初のものが『支那時文類編』（図4）である。同文書院センター所蔵本には第20期生岡村正文の署名がある。

『支那時文類編』は「例言」に「不分雅俗與難易兼收並錄分門別類以彙集之要唯使學者便於通曉現行之各種文體也」<sup>7)</sup>（文章を雅俗や難易度にかかわらずに収録し、種類別にわけることによって学習者が現行のさまざまな文体を理解しやすいようにした）とあるように実際に使われた文章をそのまま収録した例文集である。「第8章 命令欄」（「大總統令」等）、「第9章 布告欄」（「大總統布告」等）、「第10章 通告欄」（「討逆軍總司令段通告」等）、「第21章 判決例」、「第22章 附録」（上諭や奏摺等）「第1章 電報欄公電」（「馮代理大總統電」等）といった公文書や電報、「廣告欄」、「第18章 條單欄」（領収書や説明書）、「第19章 契據欄」（契約書等）、「第20章 約票券書欄」（規約文や小切手、手形等）、「第1章 電報欄私電」といった私文書のほか、新聞や雑誌からとった「第2章 時事欄」（「教實兩庁庁長發表之奇景」等）、「第3章 社會欄」、「第4章 實業欄」、「第5章 教育欄」、「第6章 交通欄」など多種多様な文章がおさめられている。

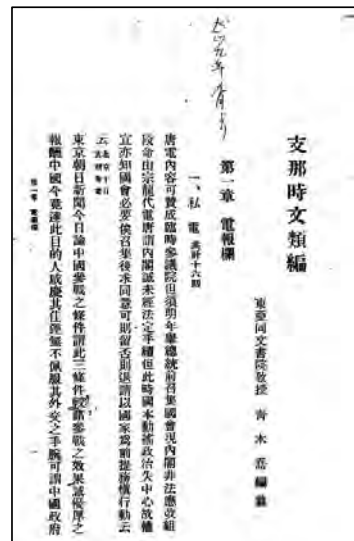


図4『支那時文類編』岡村旧蔵本

しかし「蓋將尺牘一門另成專書以便於學生修學也故於本編特附闕如」<sup>(8)</sup>（尺牘については別に専門書を用意し学生の学習に提供するので本書には収録していない）とあるように尺牘すなわち書簡文は収録していない。ここにあげられている尺牘専門書とは『現代支那尺牘教科書』（初版）のことである（図 5）。なぜそういえるのかといえは同文書院センターが所蔵する尺牘テキスト『現代支那尺牘教科書』（初版）も『支那時文類編』と同じく岡村の旧蔵本であり、後述する書き込みから両書が同時期に東亜同文書院で使われたいたことがわかるからである。

同文書院センター所蔵岡村旧蔵『支那時文類編』の本文冒頭に「大正九年九月から」、「第 19 章契據欄 20. 出売市房杜絶契其 1」（296 頁）末尾に「大正十二年六月四日青木教授」と記され、これ以降の部分には何も書き込まれていないことから 1920 年（大正 9）9 月から 1923（大正 12）年 6 月 4 日まで青木指導のもとで使われていたことがわかる。岡村旧蔵『現代支那尺牘教科書』（初版）本文冒頭には「大正十年第二学年二学期より」、「第 4 章普通書翰文第 5 節詢訪類」（163 頁）に「以上三年一学期次ハ第五章ヨリ」、「第 5 章商業通信文」（333 頁）冒頭に「第三学年第二学期」と書き込まれていることから 1921 年（大正 10）2 月から本書使用の授業がはじまり 3 年生でも用いていたことがわかる<sup>(9)</sup>。これによれば表 1 の 1908 年当時と違い岡村たち第 20 期生は 1 年生から『支那時文類編』を用いた文章語の授業があったことになる。第 20 期生は秋入学 3 年制の最後の学生だが 3 年間のうち前半は『支那時文類編』によって広範な文章語を学び、後半は書簡文を学ぶ『現代支那尺牘教科書』を併用していたのである。

『現代支那尺牘教科書』（初版）には例言や奥付がつけられていない。内容は「第 1 章寫信須知（書翰書方ノ心得）」、「第 2 章書翰ノ種類」、「第 3 章起結通套並ニ時令摘句」、「第 4 章普通書簡文」、「第 5 章商業通信文」からなり、第 1-3 章までが書簡の認め方についての説明、第 4-5 章は例文集となっている。説明部分は宛名や差出人の署名の書式について「第 1 章寫信須知（書翰書方ノ心得）」として「第一節封面式（即チ封筒ノ書方）」、「第二節封筒裏面ノ書方」、「第三節上款（即チ書翰内部ノ宛名ノ書方）」、「第四節下款（即チ發信者ノ署名）」の 4 節構成全 38 頁である。たとえば封書の宛名の書き方について「郵便ニテ發送スル信書ハ先方ノ住所姓名ヲ明細ニ記載スヘシ」<sup>(10)</sup>と注意をうながした上

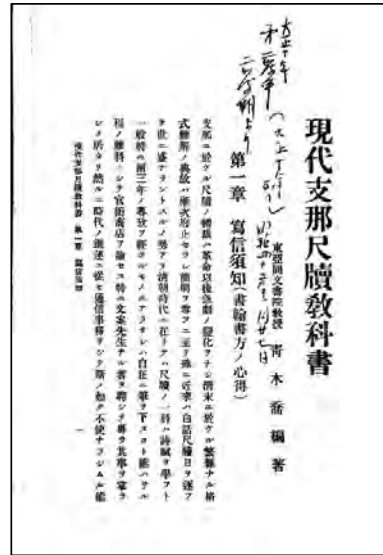


図 5『現代支那尺牘教科書』（初版）岡村旧蔵本



図 6 岡村正文（第 20 期生卒業アルバムより）

で封書裏面の日付の入れ方や封の仕方まで図で示している。そうした細かな説明で注目されるのは次にひく書信の宛名の書き方の行である。図7の例をあげ、それについて次のように述べている。なお傍線や四角形の括りは岡村の書き込みを示す。

前例ノ子才ハ先方ノ字ニシテ支那人ノ讀書シタル者ハ皆諱ト字トヲ有ス自身ニハ必ス諱ヲ用ユレトモ他人ヨリハ君主ト親ヲ除ク外諱ヲ稱スルコトヲ得ス之ヲ稱スルハ不恭ナリ宜シク深ク注意ス可シ甫ハ字ナリ台甫トナスモ可ナリ然レトモ現今ハ台甫ノ二字ヲ用キルモノ殆ント稀ニシテ一般ニ甫ノ一字ヲ用キルヲ普通トス<sup>(11)</sup>

諱の扱いなど漢籍を読むに際しては常識的なことのはずだが、大正時代の学生にとってはすでに一般的ではなかったのであろう。実際、岡村は諱と字について念入りに傍線をひいている。

では、こうしたテキストを用いた授業はどのような様子だったのだろうか。

前述したように同文書院センター所蔵の両書は第20期生岡村正文旧蔵本である。ともに受講時のものとおもわれる書き込みがあり、そこから授業の実態をうかがい知ることができる。書き込みには語義を記すものはあるが発音についてのものはない。注目するのは訓点がつけられていることである。これはテキスト本文を漢文として読んでいたことを意味する。たとえば『支那時文類編』の図8の題名「國務院總理呈——大總統……」についていえば、中国語音たとえばウェード式で表記すれば「Kuo2 wu4 yüan4 tsung3 li3 ch'êng2……」と読んでいたのではなく日本語音で「國務院總理ガ大總統ニ呈ス……」と読み下していたのである。このことは書き込みだけではなく、『現代支那尺牘教科書』（初版）の「第3章起結通套並ニ時令摘句」の例文に訓点が印字されていることから確認することができる（図9）。東亜同文書院の口語教育では少なくとも1915年（大正4）の時点で日本人と中国人の教員がペアとなって授業がおこなわれていたが<sup>(12)</sup>、みてきたように文章語の授業においては例文が中国語であっても日本の漢文として読む以上は中国人教員の必要はなく日本

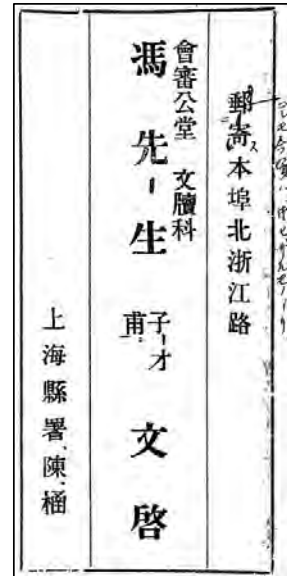


図7『現代支那尺牘教科書』（初版）岡村旧蔵本（10-11頁）

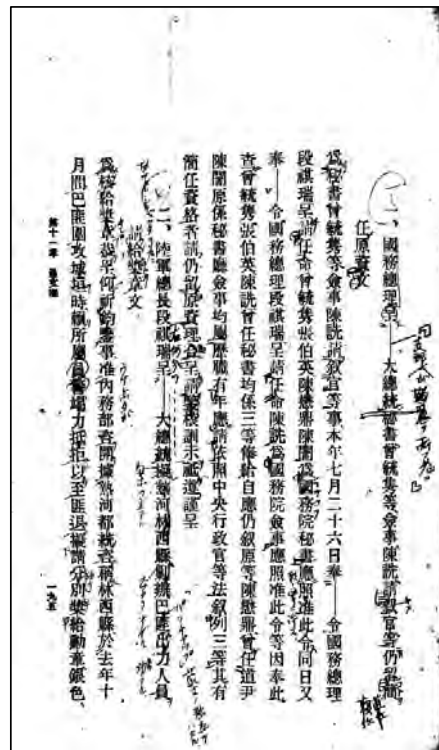


図8『支那時文類編』岡村旧蔵本



人教員だけで行われていたと考えられる。つまりこの二つのテキストを用いた授業は外国語としての中国語授業というよりも、中国語の実用文を漢文として講読するものだったのである。

両書についてもう一つ注目するのは、中国語の急速な変化への意識である。『支那時文類編』は清末民初の中国語をとりまく状況を次のように述べている。

矧現下支那之狀態非獨政體制度在於過度時代而各般事物亦莫不胥在於過度時期其如時文之體例變遷將日異而月不同焉本編所輯僅摘其現行各體之一斑耳<sup>(13)</sup>

〔現代中国は政治をはじめすべてが過渡期にあり、文章語のスタイルも日々変化している。本書に収録したのは現行種々あるスタイルの一部にすぎない〕

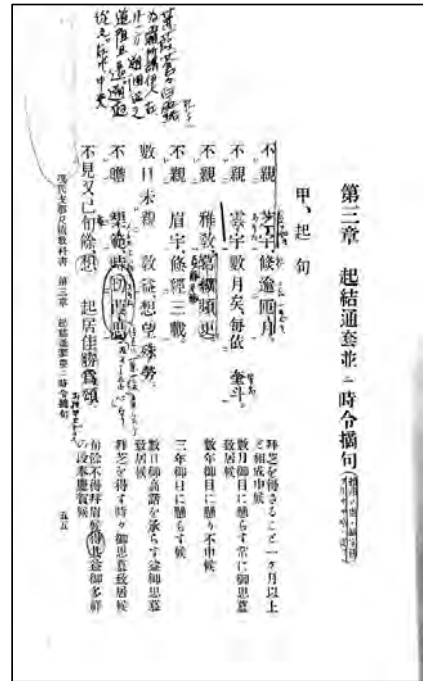


図 9『現代尺牘教科書』（初版）

自清光緒庚子以還變法自強之說風行於世而一般傾向胥尊外卑內舍舊趨新斯文日衰於是外國語之譯音暨東語文之移入者逐日見其多焉<sup>(14)</sup>

〔清の光緒新政の改革以来、外国を尊び中国を卑下し、伝統的なものを捨て目新しいものをよしとする傾向があり、優雅な文章は衰えて外国語の音訳や日本語の移入が日ごとにふえた〕

ここで述べられている外来語については次のような実例があげられている。

〔音訳の例〕

德律風 (Telephone)  
引擎 (Engine)  
馬達 (Motor)  
摩托卡 (Motor-Car)  
派司 (Pass)  
唛頭 (Mark)  
K 唛 (K-Mark)  
先令 (Shilling)  
辨士 (Pence)  
盎司 (Ounce)  
羅比 (Rupee)  
羅布 (Ruble)

佛郎 (Franc)  
生丁 (Centime)  
雪茄 (Cigar)  
撲克 (Poker)  
恩透 (Under)  
薩門 (Salmon)  
薩丁或洒丁 (Sardine)  
水門丁或士敏土  
(Cement)  
剛白渡或康辯渡  
(Comprador)

〔日本語の例〕

電話  
黑幕  
手續  
取締  
取銷  
引渡  
運動  
讓渡  
經濟  
浪人  
理髮  
旅館

『現代支那尺牘教科書』（初版）でも同じように中国語の変化が強調されている。書簡の認め方の基本を説明するはずの「第1章寫信須知（書翰書方ノ心得）」は、なぜか文章語のおかれた状況を述べることから始めている。

支那ニ於ケル尺牘ノ體裁ハ革命以後急劇ニ變化ヲナシ清末ニ於ケル繁雜ナル格式難解ノ典故ハ漸次廢止セラレ簡明ヲ尊フニ至リ殊ニ近來ハ白話尺牘日ヲ逐フテ世ニ盛ナラントスルノ勢アリ清朝時代ニ在リテハ尺牘ノ一科ハ詩賦ヲ學フト一般特ニ兩三年ノ專攻ヲ經タルモノニアラサレハ自在ニ筆ヲ下スコト能ハサル程ノ難科ニシテ官衙商店ヲ論セス特ニ文案先生ナル者ヲ聘シテ專ラ其事ヲ掌ラシメ居タリ然ルニ時代ノ進運ニ從ヒ通信事務ヲシテスノ如ク不便ナラシムル能ハサルト一般教育ノ方針科學ノ普及ニ重キヲ置クニ至リタルヲ以テ復タ昔日ノ如ク尺牘ヲ專攻スルカ如キ者漸ク減少シ美文ヲ研究スルヨリ寧ロ實用文ヲ練熟セントスルノ風尚ニ傾キ將來ニ於テハ特種ノ學者間ニ行ハル者ハ別トシテ一般ニハ文言一致的白話尺牘流行スルノ時代ニ到達スルモ亦未タ知ルヘカラス此過渡時代ニ在リテ尺牘教科書ヲ編著スルハ實ニ難事ノ難事トナス今俗ニ失セス又雅ニ過キス僅カ稍中庸ヲ得タリト思維スル材料ヲ選ンテ範ヲ示サントス<sup>(15)</sup>

このように中国語の変化を強調すると同時に、テキストがそのことに対応できない可能性があることをまるで弁明するかのように述べるというのは著者青木が中国語の変化に戸惑っていることの証左であろう。清末以来の中国語の変化は、日清貿易研究所で学び台湾や中国で活動したりするなど中国人との接触経験が豊富な彼ですら吸収しきれないと感じさせるものだったのである。

### 3. 『改輯支那時分類編』、『現代支那尺牘教科書』（1924年版）

青木喬『改輯支那時分類編』と青木喬『現代支那尺牘教科書』（1924年版）は、前出『支那時文類編』、『現代支那尺牘教科書』（初版）それぞれの改訂版と考えられる。同文書院記念センターが所蔵する『現代支那尺牘教科書』（1924年版）には「東亜同文書院第三年生瀧口義精」という第26期生の署名がある。『現代支那尺牘教科書』（1924年版）について、その「凡例」は次のように述べている。

- 一 商業尺牘ハ一班商業ノ發達ニ從フテ大ニ其面目ヲ改メタリト雖各種尺牘中收ムル所ノ文尚舊套ヲ脱スル能ハス商業尺牘詮釋中述フル所ニ適合スルモノ殆ント稀ナリ故ニ石川文吉氏商業英作文ヲ參酌シテ其不足ヲ補フ
- 一 學界及ヒ家庭ノ二類ハ前書之ヲ闕如ス今本書院ハ中華學生部ヲ附設スルヲ以テ將來日華學生ニ交遊多キヲ加フルヲ思ヒ學界類ヲ加ヘ又家庭類ハ殆ント日本人ニ必要ナキカ如クナレトモ其尊卑ノ間用キル所ノ文字自ラ區別アリ使用ノ婢僕輩ニ對シテ信書ヲ發スルノ場合之ヲ準用スルノ利アルヲ以テ之ヲ加ヘタリ<sup>(16)</sup>

引用文中の「石川文吉氏商業英作文」とは石川文吾『商業英作文講義』第1-2巻（大倉

書店、1908年)のことであろう。前版『現代支那尺牘教科書』(初版)には「第5章商業通信文」にビジネス文書の例文が収録されていたが、これを石川の英文テキストを参考に拡充したというのである。また中華学生部とは東亜同文書院内に設置された中国人を対象とした学部のこと、1920年(大正9)から中国人学生と日本人学生はともに学んでいた。前版『現代支那尺牘教科書』(初版)は私的な書簡の例文を「第4章普通書翰文」として「第1節慶賀並餽贈類」から「第15節聲明類」に収録していたが、これを『現代支那尺牘教科書』(1924年版)では「第4章普通尺牘」と改め、さらに中国人学生と日本人学生の交流を考えて「第16節學界類」、「第17節家庭類」を加えたのである。なお前版『現代支那尺牘教科書』(初版)の第1節「慶賀並餽贈類」を第7節へと順番を変えている。また、「支那人トノ交際上其稱謂ハ殊ニ複雑ニシテ適タマ其適用ヲ誤レハ禮節ニ缺クル所アル」<sup>(17)</sup>として『現代支那尺牘教科書』(1924年版)末尾には呼称をまとめた「附録稱謂表」が新たにつけられた。

このように『現代支那尺牘教科書』(1924年版)は、商務科すなわちビジネス教育中心の東亜同文書院にとって必要性が高いビジネス文書部分を充実させると同時に、学内に新設された中華学生部の中国人学生と日本人学生との交流を考えたものとなっている。

本文自体にも手が加えられており、宛名や差出人の署名の書式を説明する「第1章寫信須知」は「第一節尺牘須知」、「第二節封面式(即チ封筒ノ書方)」、「第三節上欸(即チ書翰内部ノ宛名ノ書方)」、「第四節下欸(具名即チ發信者ノ署名)」の4節構成全51頁となっている。『現代支那尺牘教科書』(初版)の同内容の部分「第1章寫信須知(書翰書方ノ心得)」全38頁を上回るボリュームである。その第一節部分「尺牘須知」は全29項の箇条書きとなっている。その最初の第1項と最後の第29項をみてみよう。

- 一 稱謂ハ尊卑ノ別アリ尋常ナル祖父輩ノ交ニ於テハ普通太老伯ト稱シ父輩或ハ伯叔輩ノ交ニ於テハ老伯ト稱シ其交誼較ヤ親密ニシテ年齒較ヤ長スルモノニハ太世伯或ハ世伯ト稱シ年齒較ヤ少キ者ニハ太世叔或ハ世叔ト稱シ若シ姻誼アルモノニハ太姻伯姻伯或ハ太姻叔姻叔ト稱シ若シ世誼ヲ以テ姻誼ヲ兼スルモノニハ太姻世伯姻世伯或ハ太姻世叔姻世叔ト稱ス〔略〕(附録稱謂表ヲ参照スヘシ)<sup>(18)</sup>

- 二 支那ノ信書ニ於テ封筒面ニ記載スルノ意味ハ受信人ニ向ヒ對稱スルニアスシテ送信人ニ命スルモノナレハ仁兄大兄或ハ台鑒等を用ユ可カラスニ反シ内信ハ對稱ナレハ台鑒大鑒雅鑒等トナスヘシ又台啓開啓文啓等ハ日本ノ親展ノ意ナレハ葉書ニハ之ヲ用ユ大鑒台鑒等トナスヘシ然レトモ仁兄我兄等ハ用ユヘカラス<sup>(19)</sup>



図 10『現代支那尺牘教科書』(1924年版) 瀧口旧蔵本。

『現代支那尺牘教科書』（初版）の「第1章寫信須知（書翰書方ノ心得）」はテクニカルな説明に入る前に中国語の変化について述べていたが、引用した部分のように『現代支那尺牘教科書』（1924年版）は文章の書き方についてのみ記している。それは文字の書き方にまでおよんでおり、「字跡ハ潦草ナル可カラス」〔乱雑な文字を書いてはいけない〕と題して次のようにのべている。

商業尺牘ハ自ラ迅速繕就ヲ以テ貴シトナス端楷ヲ作ラスシテ可ナリ但シ亦大草ヲ用ユヘカラス最モ適宜ナル者ハ行書トナス〔略〕潦草ナル可カラス墨汚ノ如キ誤字ノ如キ添註塗改ノ如キ皆人ノ憎厭ヲ取り或ハ障礙ヲ發生スルニ足ル戒メサルヘカラサル所ノ者ナリ<sup>(20)</sup>

ビジネス文書は素早く書くべきで、楷書はよいが草書を用いるべきではなく行書が最適、乱雑ではいけない、墨で汚したり誤字や書き足し書き損じを改めたりしては人に厭まれ信用を失う、と詳細な解説である。このように筆遣いまで事細かに指示していることからわかるように『現代支那尺牘教科書』（1924年版）はきわめて実用的なテキストであった。

この実用性は後に著者青木の予想もしなかった場面でも発揮されることになる。同文書院センター所蔵の瀧口旧蔵本には寄贈者による「もと26期瀧口義精氏所有敗戦後瀋陽にて41期木村隆吉が譲り受け中国側との渉外業務に大変役立つ」という寄せ書きがつけられている。敗戦後の引き揚げ時、中国側との折衝において本書は有用だったのである。

#### 4. 『支那時文類編第一輯』

『支那時文類編第一輯』はこれまで紹介されてこなかったテキストである。同文書院センター以外の所蔵をしらない。参考として奥付と例言をひく。

昭和三年三月八日印刷  
昭和三年三月十日發行  
支那上海東亞同文書院内  
編纂者 青木喬  
支那上海  
發行者 東亞同文書院  
右代表者 岡山巳吉  
上海海寧路十四號  
印刷者 蘆澤民治  
上海海寧路十四號  
印刷所 蘆澤印刷所  
支那上海  
發行所 東亞同文書院

例言

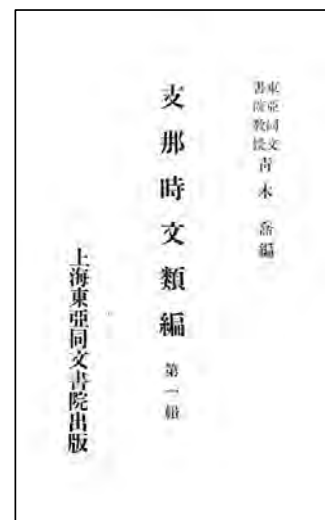


図 11 『支那時文類編第一輯』

- 一 此書ハ學生ヲシテ支那時文ノ大体ヲ會得シ進ンテ研究スルノ階梯タシムルノ目的ヲ以テ編著セルモノナレハ特ニ雅俗混淆難易兼收シ現行各式時文ノ一班ヲ窺ハシメントス但紙數ニ限リアルヲ以テ勿論完備ヲ望ム能ハスト雖心ヲ用キテ淺ク廣ク搜羅セルヲ以テ學者若シ能ク反覆熟讀シ類ヲ推シテ研究セハ其目的ヲ達スルニ庶幾カラシム
- 二 本書ハ本書院編纂ノ語學書ト相待ツテ效ヲ收ムベキ者ナルヲ以テ語學書ト重複セサルコトニ注意セリ故ニ他ノ科ニ於テ收録セルモノハ省略ニ從フ
- 三 本來時文中ニハ勿論尺牘ヲ含ムト雖尺牘ハ別ニ編纂セル專書アルヲ以テ本編ハ之ヲ省略ス
- 四 本書院興學ノ要旨及立教ノ綱領ハ紀要中ニ記載シアリト雖殆ント之ヲ讀ム者ナク學生ノ間ニ本書院設立ノ主旨ト書院ノ使命ノ有ル所ヲ知ラシメサルノ恐アルヲ以テ本書ニハ特ニ之ヲ收録セリ
- 五 凡ソ電文中之ヲ記スベキノ處詩ノ韻字ヲ用キテ之ニ代ユルモノ多シ又官報ニ於テハ發信ノ日付ノ代リニ必ス之ヲ用ユ例ヘハ一日ニハ上平聲下平聲上聲去聲入聲ノ第一字ヲ用キ二日ニハ其各第二字三日ニハ其第三字ヲ用キルカ如シ而シテ其韻字ハ左ノ如シ

上平聲 一東 二冬 三江 四支 五微 六魚 七虞 八齊 九佳 十灰 十一真  
十二文 十三元 十四寒 十五刪

下平聲 一先 二蕭 三肴 四豪 五歌 六麻 七陽 八庚 九青 十蒸 十一尤  
十二侵 十三覃 十四鹽 十五咸

上 聲 一董 二腫 三講 四紙 五尾 六語 七広 八荅 九蟹 十賄 十一軫  
十二吻 十三阮 十四旱 十五潛 十六銃 十七條 十八巧 十九皓 二十哿  
二十一馬 二十二養 二十三梗 二十四迥 二十五有 二十六寢  
二十七感 二十八儉 二十九謙

去 聲 一送 二宋 三絳 四寘 五未 六御 七遇 八霽 九泰 十卦 十一態  
十二震 十三問 十四願 十五翰 十六諫 十七霰 十八嘯 十九効 二十号  
二十一箇 二十二禡 二十三漾 二十四敬 二十五徑 二十六宥  
二十七沁 二十八勘 二十九豔 三十陷

入 聲 一屋 二沃 三解 四質 五物 六月 七曷 八黠 九屑 十藥 十一陌  
十二錫 十三職 十四緝 十五合 十六葉 十七洽

發信者ハ自己ノ姓ノ次ニ韻字ヲ加ヘテ何日發電セルカヲ示ス普通十五日以前ニハ上下平ノ韻字ヲ用キ十六日以後ニハ上去聲ノ韻字ヲ用ユ而シテ入聲ノ字ヲ用キルコト稀ナリ又三十一日ハ韻字ナキヲ以テ世字或ハ引字ヲ用ユ或ハ卅一ト示スモ可ナリ

又月及ヒ時刻ヲ示ス時ハ十二支ノ字ヲ用キテ之ニ代ユルモノノ代リニ用キル時ハ韻字ノ前ニ置キ時刻ノ代リニ用キル時ハ韻字ノ後ニ用ユ可シ其月ニ代ルモノハ左ノ如シ

一月 (子) 二月 (丑) 三月 (寅) 四月 (卯) 五月 (辰) 六月 (巳)

七月 (午) 八月 (未) 九月 (申) 十月 (酉) 十一月 (戌) 十二月 (亥)

又時刻ノ代リニ用キルモノハ左ノ如シ

子刻 午後十一時至午前一時 丑刻 午前一時至三時

寅刻 午前三時至五時 卯刻 午前五時至七時

辰刻午前七時至九時	巳刻午前九時至十一時
午刻午前十一時至午後一時	未刻午後一時至三時
申刻午後三時至五時	酉刻午後五時至七時
戌刻午後七時至九時	亥刻午後九時至十一時

昭和三年一月吉日 編著者識

『支那時文類編第一輯』は『支那時文類編』と同じく例文集である。語義や説明はついていない。『支那時文類編』、『改輯支那時分類編』からつづく文章語例文集の後継テキストであろう。

「第一輯」とあるように続輯を想定していたのだろうが、刊行と同時期に著者青木は東亜同文書院を退職しており、第二輯以降は出ていないとおもわれる。

なお同文書院センター所蔵本には「第廿七期生大屋保義」という署名があり、東亜同文書院生の旧蔵本であったことがわかるものの岡村旧蔵本にみられたような授業の状況をうかがわせる書き込みはない。しかし『支那時文類編第一輯』による授業もやはり漢文講読のスタイルだったようである。なぜならば上掲の「例言」第4項にあるように東亜同文書院の設立趣意書「興學ノ要旨」〔興学要旨〕、「立教ノ綱領」〔立教綱領〕<sup>(21)</sup>が収録されているからである。この2編の文章は東亜同文書院院長根津一によるものだと伝えられている。彼は東亜同文書院で『大学』を講義しているように漢籍の素養はあったのだろうが専門的に中国語を学習した経験はない。つまり新たに収録された2編の文章は日本人が書いた漢文なのである。それを例文としているということは、やはりテキストの文章を漢文として読んでいく授業が行われていたことを示している。

### Ⅲ 清水董三、福田勝蔵テキストについて

青木喬退職後の文章語テキストには福田勝蔵による『商業尺牘教科書』・『商業応用文件』、『普通尺牘文例集』がある。しかしこれら以外にも文章語のテキストはあったようである。『商業尺牘教科書』、『普通尺牘文例集』の「例言」にはそれぞれ「前本院教授清水董三氏の編せる商業尺牘文例」、「本書ハ一半ハ、頭初前教授清水董三氏編纂シ、後編者ノ増補セル文例集第一輯及ビ編者ガ前講師齊鐵恨氏ト共編セル同第二輯ニ採リシ」と記されており、未見のため確認できないが清水董三『商業尺牘文例』、清水『普通尺牘文例集第一輯』、清水編福田増補『増補普通尺牘文例集第一輯』、『普通尺牘文例集第二輯』と題するテキストの存在をうかがわせる。

この清水と福田はともに東亜同文書院卒業生であるが、彼らが教員として活動するようになると東亜同文書院の文章語教育に変化がみられるようになる。たとえば科目名の変化である。1908年当時に口語授業を「清語」とし



図 12 清水董三（第20期生卒業アルバムより）

ていたのに対して文章語授業は「清語尺牘」ではなく「漢文尺牘」となっていたが、これは文章語を中国語というよりも日本の漢文の延長においていたことを意味するだろう。これが1921年になると口語を「支那語」とするのに対して文章語も「支那時文及尺牘」と呼ぶようになり、はっきりと中国語として位置づけるようになってきているが、これが時期的に清水の登場と重なっているのである。

清水は1893年（明治26）栃木県生まれ、第12期生として学び1919年（大正8）母校の中国語教員となるが、1929年（昭和4）に外務官僚に転じ外務省翻訳官、同研修所教官、駐中華民國公使、外務審議官を歴任し1970年（昭和45）死去している。兄はアメリカやフランスでも活躍した画家清水登之。彼について特筆すべきは、それまでの尺牘授業で学生に毛筆を使わせていたものをペン書きに変えさせたことである<sup>(22)</sup>。前述したように東亜同文書院の教育の中心はビジネスであったが、授業で使用する筆記具の変更はビジネス環境の変化を反映させたものであった。近代におけるビジネスでの文字の書き方の変化について文化人類学者梅棹忠夫は次のようにのべている。



図 13 福田勝蔵（第32期生卒業アルバムより）

事務とは「かく」である。達筆でさらさらと商業用書類をしたためることが、番頭の重要な資格のひとつだった。商人の卵たちは新聞紙をまき紙のようにまいて左手にもち、右手に毛筆をもって字をかくことを、一所懸命にけいこした。明治のころの和紙の伝票が、たまたま保存されているのをみたことがある。それは、達筆でうつくしい。商業文書とはおもえない。芸術的でさえある。そこには、日本商業における、洗練された美的感覚のかがやきがある。

しかし、こういう方式は、美的であっても、大量の事務を処理するには不向きである。日本商業がしだいに発展して、取引量がふえ、テンポがはやくなるとともに、事務方式がもっと便利なやりかたにおきかえられるのは、当然のいきおいであった。

まず、毛筆はしだいにうとんじられた。かわって、ペンが登場した。<sup>(23)</sup>

むかしから、事務屋になるためには字がうまくなければいけないとかがえられてきた。明治時代なら、字のへたな丁稚は番頭になれない。ひまさえあれば筆で習字した。大正以降はペン習字である。<sup>(24)</sup>

青木喬が図3のような毛筆による美しい文字でビジネス文書を書く世代ならば、清水以降はペン字だったのである。このように東亜同文書院がビジネス環境の変化に合わせて文章語の筆記方法を改めていたことに、この学校の実践的なビジネス・スクールとしての性格をみてとることができる。

福田は埼玉県出身の第 20 期生である。東亜同文書院で中国語教員をつとめ、1939 年（昭和 14）大学昇格時にも教員であったが詳しい経歴はわからない。彼の文章語テキストのうち同文書院センター所蔵の『商業尺牘教科書』と『商業応用文件』は書名が紹介されたことはあるものの、内容についてはふれられたことがない新資料といってよいものである<sup>(25)</sup>。

## 1. 『商業尺牘教科書』

福田勝蔵『商業尺牘教科書』は「教科書」と題しているが内容は例文集であり、青木喬の『現代支那尺牘教科書』（初版）や『現代支那尺牘教科書』（1924 年版）のような解説部分はない。同文書院センター以外の所蔵が確認できないことから、参考として奥付と例言をひく。

〔奥付〕

昭和八年二月二十日印 刷  
昭和八年二月二十五日發 行  
昭和十一年三月二十五日改訂再版  
昭和十四年四月 十 日三版發行  
定價金五拾錢  
著 作 者 上海東亜同文書院華語研究會  
右 代 表 福 田 勝 蔵  
上海東亜同文書院支那研究部  
發 行 者 秀 島 達 雄  
上海海甯路三〇〇號  
印 刷 社 蘆 澤 多 美 次  
上海海甯路三〇〇號  
印 刷 所 蘆 澤 印 刷 所  
上海海格路一九五四號  
發 行 所 東亜同文書院支那研究部

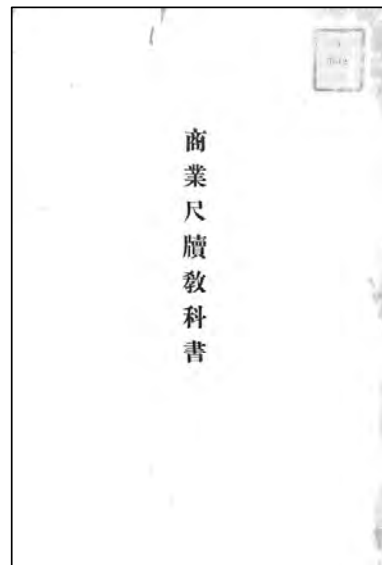


図 14 『商業尺牘教科書』

例言

本書は尺牘教科書の一として編纂せるものにして、専ら商業関係のものを輯録せり。從來坊間に行はるゝ商業尺牘は、中國人相互の間に應酬せらるゝ體裁のもの多く、必ずしも實用に適せざるものあるに鑑み、編者は外人對中國人の間に行はる可き取引關係に着目し、この方面の尺牘を努めて多く輯録せり。

本書には前本院教授清水董三氏の編せる商業尺牘文例より拔萃せるもの少からず其他編者が英文コレスポデンスより譯出したるもの亦多し。編者の翻譯に係るものは前講師齊鐵恨氏の校閲を仰ぐ筈なりしも、種々の支障により其意を卒さず、匆々上梓するに至れり。訂正増補を後日の機會に俟つ所以なり。

本書に尽さざりし許多の文例は、隨時課堂に於て補講せんことを期す。



昭和七年四月下浣  
東亞同文書院 編者識

同文書院センター所蔵本に署名はないが多数の書き込みがある。それは『現代支那尺牘教科書』（初版）や『支那時文類編』にあった漢文を読み下すための訓点や送り仮名ではなく、ほとんどは語義を説明するものである。そうした書き込みで興味深いのは中国語で書かれたものがあるということである。たとえば図 15 の上部には次のように記されている。

承辦＝承受辦理  
曾＝曾經、従前  
有年＝歴有年所  
年数很多  
交往＝交情來往  
委辦＝委代辦理  
採＝办-賜-買  
副＝称・誉・報  
賜顧＝照顧

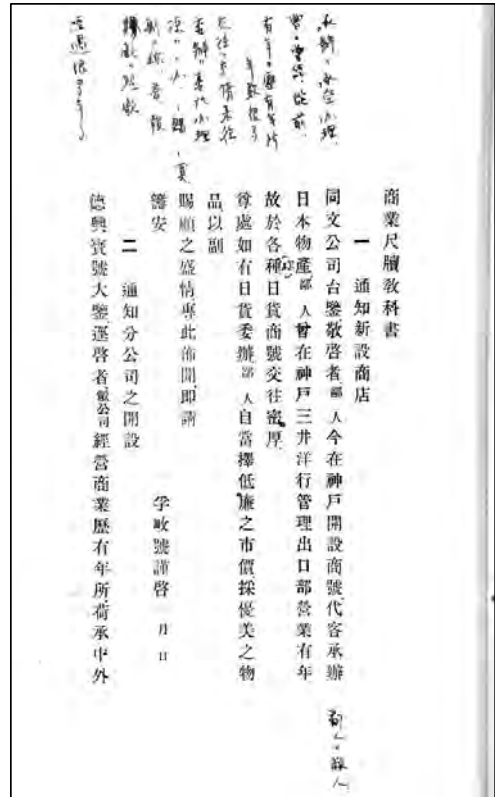


図 15『商業尺牘教科書』

經過很多年了

このように中国語で語義が記されているというのは、テキストの文章を中国語として読んでいたことを示している。

このことをよりよくあらわしているのが発音についての書き込みである。図 15 本文 3 行目「密」と 4 行目「廉」には声調をあらわす圈点がつけられている。これは戦前の中国語テキストでは一般的な声調の表記方法であり、点を文字の左下につければ第 1 声、左上は第 2 声、右上は第 3 声、右下は第 4 声であることを示している。声調だけではなく発音そのものを書き入れている箇所もある。たとえば図 16 は「竊」について圈点で第 4 声としめしつつウェード式で「ch'ieh」と音を記している。図 17 も「盜」について圈点で第 4 声、ウェード式で「tao」であるとしている。

このように本書を用いた授業は、以前のような漢文講読スタイルではなく、中国語音でテキストを読むものであった。つまりは中国語を完全に外国語として扱う授業が行われていたのである。

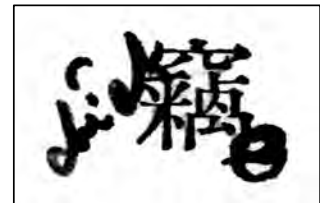


図 16『商業尺牘教科書』（13 頁）



図 17『商業尺牘教科書』（13 頁）

## 2.『商業応用文件集』

同文書院センターは刊行時期が同じ『商業応用文件集』を2冊所蔵している。ともに書き込みがあり、1冊の裏表紙には「上海海格路交通大学跡東亜同文書院広末治男鈴木信」（以下広末鈴木旧蔵本）の署名がある。例言や凡例など前書きの類いはない。本書も同文書院センター以外の所蔵が確認できないものであり参考として奥付をひく。

昭和九年三月三十日印刷

昭和九年四月一日發行

昭和十年三月三十日再版發行

昭和十一年三月十三日三版發行

昭和十三年四月一日四版發行

定價 金壹圓貳拾錢也

著 作 者 上海東亜同文書院華語  
研究會

右代表者

福 田 勝 藏

東亜同文書院支那研究部

發 行 者

福 崎 峰 太 郎

上海北四川路餘慶坊六十四號

印 刷 人

佐 藤 完 太 朗

上海北四川路餘慶坊六十四號

印 刷 所

福 興 印 刷 所

上海海格路一九五四號

發 行 所 東亜同文書院支那研究  
部

「応用」と題しているように『商業応用文件』はさまざまなビジネス文書を「上編 票單條類」（小切手や証券等）、「中編 契據類」（契約書等）、「下編 廣告啓事類」（広告等）に分類して収録した例文集である。

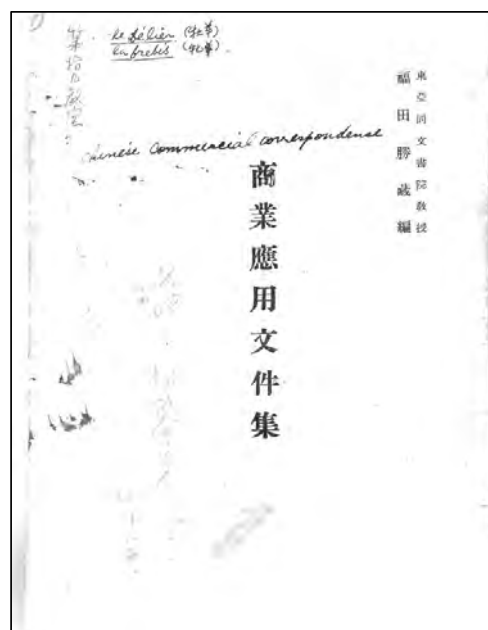


図 18『商業応用文件集』（広末鈴木旧蔵本）

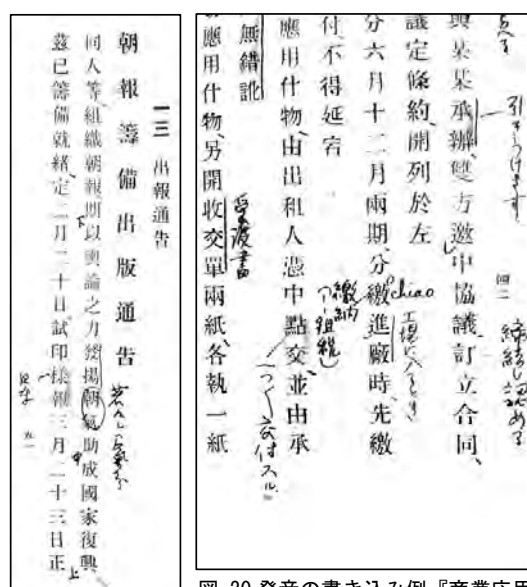


図 19 訓点の書き込み例『商業応用文件集』（広末鈴木旧蔵本 91 頁）

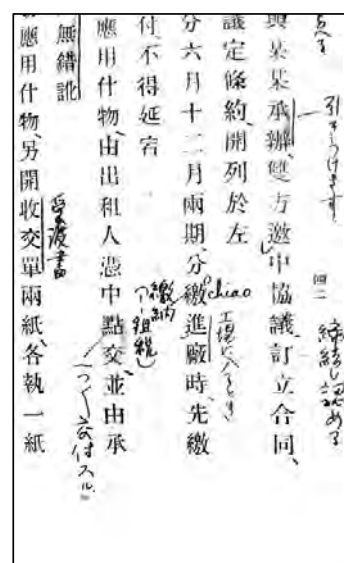


図 20 発音の書き込み例『商業応用文件集』（広末鈴木旧蔵本 42 頁）

広末鈴木旧蔵本の書き込みには訓点・日本語での語義の説明・圈点とウェード式による発音表記がある。例えば図 19 の本文 1 行目には訓点、図 20 の 3 行目には「繳」にウェード式で「chiao」と第 3 声圈点がつけられ、さらにそれぞれに語義の説明が記されている。本書を用いた授業は漢文訓読と外国語授業スタイルの折衷的なものだったようである。

広末鈴木旧蔵本にはそうした授業を担当していた教員についての書き込みがみられる。次にひくのは 57 頁上部にある書き込みである（図 21）。

發音が少しおかしいが  
話しは良く分る人  
張慶著  
「一葦（號）」  
是ヲ ssü ノ如ク  
發音シテキル

この張慶著は東亜同文書院の教員である<sup>(26)</sup>。「是」が「ssü」になるとあるが、拼音になおせば「shi」を「si」と発音するということである。張慶著はそり舌音を使わない方言地域の出身だったのであろう。東亜同文書院が教えていたのは北京語であつたから、そり舌が抜ける発音に学生は違和感をもったのである。こうしたコメントが書かれているということは、『商業応用文件集』を用いた授業に張慶著がいたということである。文章語の授業に中国人教員がいたのである。では、中国人教員だけで授業がおこなわれていたかといえば、そうではなく傍らには日本人教員もいた。それは「福田教授訳不明確」という書き込みから確認することができる（図 22）。張慶著が中国語で例文を朗読し時に口語表現で語義を説明し、福田勝蔵が日本語に訳したり時に訓読したりして授業が進められていた

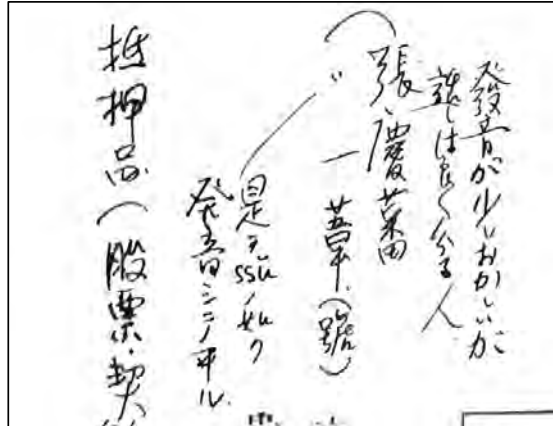


図 21 教員評の書き込み『商業応用文件集』（広末鈴木旧蔵本 57 頁）

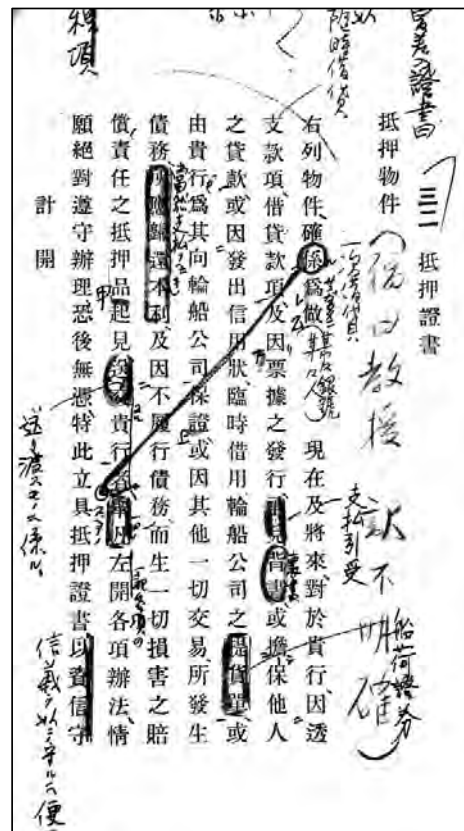


図 22 『商業応用文件集』（72 頁）

のである。会話テキスト『華語萃編』を用いた口語授業では中国人と日本人の教員がペアとなって授業が行われていたが、1938年（昭和13）時点の本書を用いた文章語授業でも同様だったのである。発音についての書き込みがあった前出『商業尺牘教科書』も同様の体制で授業が進められていたのであろう。これは漢文としてテキストを読んでいた青木時代とはまったく異なる授業風景である。

### 3. 『普通尺牘文集』

同文書院記念センターは刊行時期が同じ『普通尺牘例文集』を2冊所蔵している。「東亜同文書院二乙斉藤」の署名と「齊藤蔵書」印があるものと、「東北行轅留用日籍 長春 検閲訖 □□ 技術員工管理處」と押印されたものである（図23）。後者は日本敗戦後に国民党統治期の長春で使用されたのであろう。

書名に「普通尺牘」とあるように、本書は一般的な書簡文を作成するためのテキストである。冒頭に手紙の書き方についての「寫信須知」がおかれ、次に名刺や書き置きなど簡便な文例の「上篇 名片文例 便條文例」、信書の文例の「中篇 信函文例」、年賀など挨拶や病人への見舞い状など生活にかかわる文例の「下編」、冠婚葬祭に関わる文例の「附録」とさまざまな例文が収録されている。

『現代支那尺牘教科書』（初版）と『現代支那尺牘教科書』（1924年版）にも「寫信須知」と同名の文章が収録されていたが、本書のものはそれらいずれとも異なるもので、波多野太郎が「特に本書の寫信須知は類書の中の抜群のものである」<sup>(27)</sup>と評しているように具体的でわかりやすい解説文となっている。その構成を次にあげる。

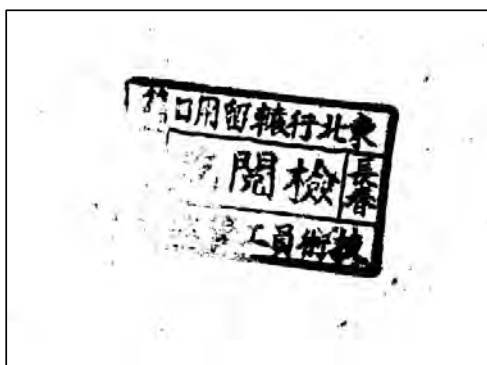


図 23 『普通尺牘教科書』への東北行轅による押印

#### 封筒の書き方

- (一) 姓字と呼稱
- (二) 台啓
- (三) 緘
- (四) 受信者地址
- (五) 日付
- (六) 返事の要求其他
- (七) 封背

#### 〔封筒の宛名書き例〕

- (一) 直接郵送の場合
- (二) 間接郵送の場合
- (三) 友人に拖し受信者の地に携行し僕役に命じて送らしむる場合

- (四) 友人に拖し手づから交付せしむる場合
- (五) 僕役を遣はして送る場合
- (六) 同封して送る場合

用箋

- (一) 對摺式
- (二) 兩摺式
- (三) 打千式

封筒に装入する法

抬頭法

- 單抬法
- 平抬法
- 空格

以前の「寫信須知」が、『現代支那尺牘教科書』（初版）では中国語の変化など書簡の書き方とは直接関係のない内容にふれるなどして全 38 頁、『現代支那尺牘教科書』（1924 年版）では小見出しもないままに書簡の基礎として 29 項目を簡条書きするなどして全 51 頁だったのに対して、本書はよりわかりやすく見出しを細かく立てつつ全 24 頁とコンパクトにまとめられている。一例として上掲の「用箋」部分をみてみよう。

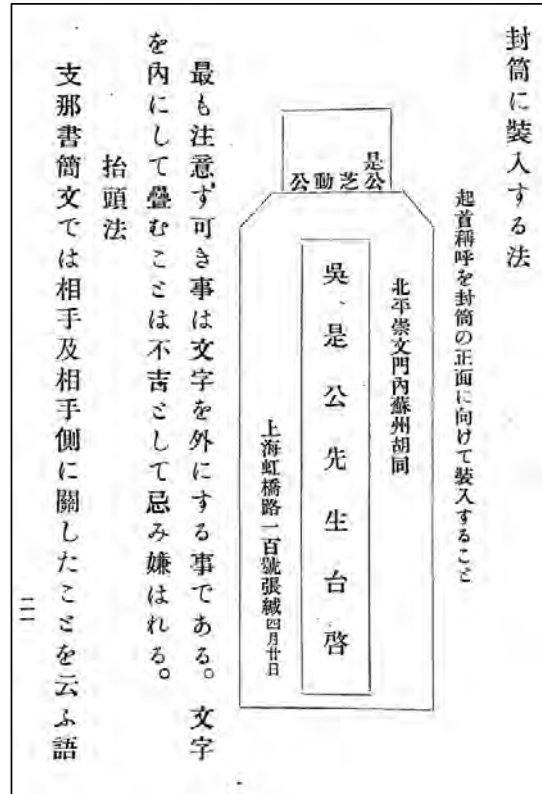


図 24 『普通尺牘教科書』 齊藤旧蔵本

支那では八行紙と云つて八行紅罫の信箋を用ひるのが普通である。邦人の喜ぶ淺黄色の罫の入つたもの若くは此の地色の用箋は訃報、悔禮狀など服喪中の人が用ふるものであるから誤用して笑はれてはならぬ。

書体は楷書或は行書で丁寧認める可く、預めよく行の配置を考へて成る可く二枚の用箋に空行を残さぬ様又一字で一行にならぬ様注意して認める。簡單なものは一枚でも、長いものは四枚以上に亘るも差支ないが、只三枚にはならぬ方がよい。「三凶四吉五平安」とて三の數を嫌ふのは支那の習慣であるから。(28)

これは便箋の罫線の色や枚数、用いる書体や字の埋め方についての説明だが、いずれも日本人が誤りやすい事柄についての的確に指示するものとなっている。またこの部分につづく「封筒に挿入する法」ではイメージしやすく図を示して説明している（図 24）。

同文書院記念センターが所蔵する 2 冊の『普通尺牘教科書』に残る書き込みは『商業尺牘教科書』と同じく語義の説明とウェード式、圈点による発音だけであり訓点はない（図 25）。「例言」に「本書は本院第二、三學年用教科書（毎週一時間）トシテ編纂セルモノニシテ、別冊商業尺牘教科書ノ姉妹篇タルモノナリ」とあることから、『普通尺牘教科書』

と『商業尺牘教科書』は同様の体制で授業がすすめられていたと考えられる。専門学校昇格後の東亜同文書院では2-4年生にかけて週に2コマずつ文章語の授業があったが(表1)、2-3年生は『普通尺牘教科書』を用いた一般的な書簡文の授業と『商業尺牘教科書』を用いたビジネス文書に特化した授業がそれぞれ週1コマずつ行われ、4年生ではより難度が高い『商業応用文件集』を用いた授業が週2コマ行われていたと考えられる。

## おわりに

以上、東亜同文書院の中国語の文章語教育について、同文書院記念センターが所蔵するテキストを中心に検討し、これまで不明であったその実態をあきらかにした。

確認することができる東亜同文書院による最初の文章語教育専用テキストは青木喬によるものである。1901年から1945年(昭和20)まで上海にあった東亜同文書院の歴史の中で彼は1908年から1928年のながきにわたって文章語教育を担当し5種類の東亜同文書院専用テキストを出した。3年制であった時期は『支那時文類編』によって文章語全般が、『現代支那尺牘教科書』(初版)によって書簡文が教えられていた。4年制となっても、それぞれの後継テキスト『支那時文類編第一輯』、『現代支那尺牘教科書』(1924年版)が出され、常に一般文書用と書簡文用の2種のテキストによる文章語教育がおこなわれていたのである。この青木時代の特徴は実質的に漢文の授業であったということである。中国語音で読む必要がない以上は日本人教員のみで授業がおこなわれていたと考えられる。つまりこの時期の東亜同文書院では中国語の文章語は純然たる外国語としては教育されていなかったともいえる。

しかし清水董三や福田勝蔵という東亜同文書院卒業生が教壇に立つようになると授業のスタイルに変化があらわれる。まず清水によって青木時代は毛筆でおこなわれていた文章語の授業がペン書きとなった。毛筆で美しい文字を書くことがよしとされていた時代よりも大量の文書処理に迫られることになったビジネス環境の変化に対応したのである。福田時代は、2-3年生では『商業尺牘教科書』によるビジネス文書授業と『普通尺牘文例集』による書簡文授業がおこなわれ、4年生では応用的な内容の『商業応用文件集』による学

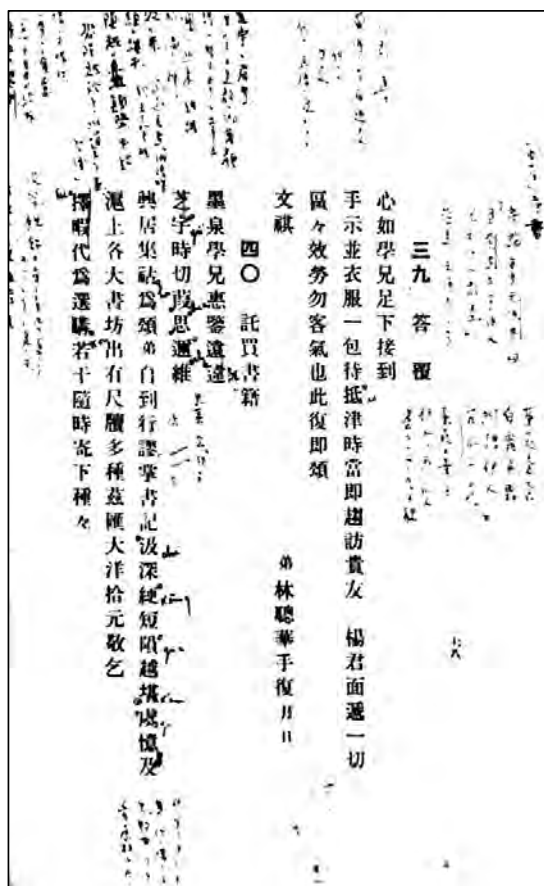


図 25 語義や発音についての書き込みの例(『普通尺牘教科書』齊藤旧蔵本)

習がすすめられた。同文書院センターが所蔵する『商業尺牘教科書』・『普通尺牘文例集』・『商業応用文件集』には、発音注記や中国語での語義の説明のほか、中国人教員と日本人教員がペアとなって授業をすすめていたことをしめす書き込みがあり、これらのことから福田時代の授業は青木時代の漢文講読スタイルとは異なる完全な外国語授業となっていたことがあきらかとなった。

このように東亜同文書院の中国語教育の一翼を担う文章語教育は、当初は外国語というよりも漢文学習といってよいものだったが、次第に中国語の文章語を外国語としてとらえて学習するものへと変化していたのである。こうした変化が卒業生教員を中心とする東亜同文書院内の中国語教育活動での教学経験によって自律的におこなわれていたことは、この学校の中国語教育の独自性をしめすものである。

なお本稿で扱った「時文」や「尺牘」といった日常生活で使われる実用的な文章語は、戦後の中国語教育において重視されてきたとはいいがたい分野である。しかし近年の三瀧正道による現代中国語における文章語教育の重要性の主張や<sup>(29)</sup>、実質的に文章語表現に注目する中西千香によるチラシやメニュー、看板のフレーズをレアリア教材として活用しようとする教授法の提起など<sup>(30)</sup>、中国語教育の現場では文章語教育見直しの動きがみられる。こうした中国語教育をとりまく現状において、会話によるコミュニケーションを目指す口語教育だけではなく、文章語を処理する能力を培うための専用テキストを作成し、さらに教授法を改良しながら文章語教育を展開していた東亜同文書院のとりくみは現代的意義をもつもののだといえよう。

〔…〕は筆者記。

本稿は JSPS 科研費基盤研究 (C) 26370747 助成による研究成果の一部である。

(1) 波多野太郎『覆印語文資料提要』、不二出版、1996 年、71 頁。

(2) 『禹域学会書目』、〔上海〕禹域学会、1925 年。同書は禹域学会を「東亜同文書院内には禹域学会と称する一研究機関がある、山田岳陽教授、清水董三教授等二三特志の教授により組織せられたもの」（1 頁）と紹介している。

(3) 東亜同文会内対支功労者伝記編纂会、中島真雄著『続対支回顧録』下巻、大日本教化図書、1941 年、463-472 頁。

(4) 仁科昌二編著、朱蔭成、青木喬訂補『実用支那商業文範』、〔上海〕日本堂、1920 年、凡例。波多野太郎編『中国語学資料叢刊』第 3 編尺牘編第 4 卷（不二出版、1986 年）参照。

(5) 東亜同文会内対支功労者伝記編纂会『対支回顧録』、対支功労者伝記返済会、1936 年、700 頁。六角恒廣『中国語教育史の研究』、東方書店、1988 年、307 頁。

(6) 仁科、前掲書、序。

(7) 青木喬『支那時文類編』、〔上海〕東亜同文書院、1918 年、例言 1 頁。

(8) 同書、例言 2 頁。

(9) 岡村の書き込みは第 1-4 章の途中（163 頁）までと第 5 章の一部（333-404 頁）になされており、この部分が授業で教えられたと考えられる。

(10) 青木喬『現代支那尺牘教科書』（初版）、10 頁。

(11) 同書、11-12 頁。

(12) 1915 年に入学した鈴木枳郎（東亜同文書院大学教授・愛知大学教授）の回想による（愛知大学五十年史編纂委員会編『大陸に生きて』、風媒社 1998 年、23 頁）。

(13) 青木、前掲書、1918 年、例言 1 頁。

(14) 同書、例言 1 頁。

(15) 青木、『現代支那尺牘教科書』（初版）、1-2 頁。

(16) 青木喬『現代支那尺牘教科書』、〔上海〕東亜同文書院、1924 年、凡例 2-3 頁。

- 
- (17) 同書、凡例 3-4 頁。
- (18) 同書、1-2 頁。
- (19) 同書、20 頁。
- (20) 同書、397 頁。
- (21) 東亜同文書院「興学要旨」、「立教綱領」については今泉潤太郎「東亜同文書院『興学要旨』、『立教綱領』を読む」（『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』第 3 号、愛知大学東亜同文書院大学記念センター、2009 年 3 月）に詳しい。
- (22) 東亜同文書院大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史』、滬友会、1982 年、383 頁。
- (23) 梅棹忠夫『日本語と事務革命』、講談社（講談社学術文庫）、2015 年、25-26 頁。
- (24) 同書、86 頁。
- (25) 東亜同文書院大学史編纂委員会、前掲書、274 頁。
- (26) 張慶蕃は 1940 年 4 月時点で大学予科臨時講師、同文書院臨時講師として中国語教員である（東亜同文書院大学史編纂委員会、前掲書、157 頁）。また「父欧陽可亮は、華語辞典編纂員として 1942 年 4 月に上海東亜同文書院大学に就職すると、鈴木択郎、熊野正平、野崎駿平、坂本一郎、影山巖、岩尾正利、内山雅夫、山口左熊、本田弥三郎、金丸一夫、尾坂徳司の 11 名の日本人教職員と、陳大慧、田徳宝、靳麟、張慶蕃、曹天蔭、蔣君輝、李秀晶の 7 名の中国人教職員が一心に辞典を編纂していた」（関登美子「“言為心声、書為心画”：父欧陽可亮の症例」『日中文学文化研究学会通信』12 月号、2014 年 12 月 1 日、3 頁）にも名がある。
- (27) 波多野、前掲書、1996 年、135 頁。
- (28) 福田勝蔵『普通尺牘教科書』、〔上海〕東亜同文書院支那研究部、1937 年、16 頁。
- (29) 三渚正道「「韻律から見た現代中国語白話書面語（論説体）の特徴」初探」（『麗澤大学紀要』第 98 巻、2015 年 1 月）、『論説体中国語読解力養成講座新聞・雑誌からインターネットまで』（東方書店、2010 年）。
- (30) 中西千香「レアリアにあらわれる中国語の語彙の特徴：スーパーのチラシを中心に」『日中語彙研究』(3)、愛知大学中日大辞典編纂所、2014 年 3 月。